

新聞を使った授業⑦

今回紹介するのは、放送委員会の活動の様子です。放送委員会では、これまでも給食のひと時に、リクエストのあった音楽をかけたり、様々なニュースやランキングを紹介したり、週の予定を伝えたりと、情報発信をしてきました。情報収集の手段はインターネットが中心でしたが、NIEの実践として、**新聞記事の紹介**を行うようにしました。

この日は、当番の3年生2人。『看取り医者』という本の著者・平野さんが、土浦一高で講演を行った記事と「ラクビーW杯でニュージーランドなど外国人選手が、日本のおもてなしに、お辞儀で応えた記事」を紹介していました。事前に記事を選んで準備をしてきた2人は、堂々と自分が気になった記事を発表していました。



お昼の放送で新聞記事を紹介する放送委員

気になる記事コーナー15

新聞には、一般の読者が自分の考えや意見を新聞社に送って、紙面に発表する**投稿のコーナー**があります。

今回紹介する記事は、教育関係の投稿が載っている「**学びや発**」というコーナーです。「**給食を残さない**」と題した記事を投稿しているのは、妹さんが学校の栄養士をしているという小学校5年生の担任の先生。クラスの給食時に残菜で悩んでいた日々とそれを劇的に変えたエピソードを紹介しています。

先生自身と子どもたちの意識を変えたのは、「**命をいただく**」という考え。先生が夏休みに体験した遊牧民との暮らしで目にした**ヤギの解体**。「命をいただく」ことを実感するとともに、その体験を子どもたちに伝えたことで残菜が激減したそうです。自発的に残菜を減らす取り組みを始めた子どもたちは立派ですね。

皆さんは、給食を残していませんか？皆さんも是非、「命をいただく」ことについて考えてみてください。

日本経済新聞 11月25日(月)の記事

「どうしたら残菜を減らせるだろう」。学校の栄養士である妹はいつも頭を抱えている。先日はこんな話もした。「台風19号の被害で食材が届かず、近くのスーパーをはしごして、やっとの思いで集めた」。毎日同じ時間に給食があることを当たり前のようについていた自分を反省した。全国の学校給食の残菜は年約5万トに上り、大きな問題だ。受け持っている5年生も食が細い。

学びや発 給食を残さない

偏食の子が多く、おかわりをする子は数人。「残間、一緒に暮らした。お究とともに夏の旅行記をうていた準備は今は8分程度になり、ゆつくり食べる余裕が生まれた。以前は残りがある」と担任の私が配っていたが、今ではリーダーが呼び掛けてくれる。栄養士の方の苦勞についても話した。無理に食べさせることなく、給食の残菜は減らせる。「命をいただく」ことについて、子どもと考えることから始めてはどうか。(羽)

「命をいただく」考えて

偏食の子が多く、おかわりをする子は数人。「残間、一緒に暮らした。お究とともに夏の旅行記をうていた準備は今は8分程度になり、ゆつくり食べる余裕が生まれた。以前は残りがある」と担任の私が配っていたが、今ではリーダーが呼び掛けてくれる。栄養士の方の苦勞についても話した。無理に食べさせることなく、給食の残菜は減らせる。「命をいただく」ことについて、子どもと考えることから始めてはどうか。(羽)

はほぼ毎日、完食するようになった。要因は私と児童の意識の変化であってソーセージを作る。私の意識を大きく変えてくれたのは妹の存在。敬意。これが命をいただく「給食会議」を開き、準備やおかわりの仕方を見